
とあるところの平和？なマフィア

閏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるところの平和？なマフィア

【Nコード】

N9804K

【作者名】

閏

【あらすじ】

タイトルそのままです。

愉快で可笑しいマフィアに翻弄される男の話。

ただし、男性は主人公ではなく、第三者です………続編を書くつもりですが。

暇つぶしにどうぞ。

(前書き)

長編連載中の息抜きです。
気軽にとりあげてください。

高級車がたった今止まった其処は、大きな屋敷の門の前。

その屋敷は大き過ぎて、左右の端が肉眼では見えないほどだ。

門から見える中には、車が余裕を持って通れるほどの道と、その傍には花が植えられていて。そして、道を挟んだ敷地の左側には噴水が見え、右側には何故か森が見える。とにかく、普通ではない。

どこの王侯貴族だ、と突っ込みたくなるほどに。というかもう、文化遺産でいいのではないだろうか。と思わせるほど。

しかしその車から降りてきたのは、ガラの悪い、男で。

明らかに堅気の間人ではないと分かる。はっきり言って、この景色に似合わなさ過ぎる。

人選を間違えたのではないだろうか。

さて、そんな男がなぜこんな何処かの楽園のような屋敷の前に居るのかという点。

「おいそこの下っ端。今から、ディッセターレファミリーに行つて来い。」

「はいいい?! ディッセターレファミリーって、…良く、ボスには気を付ける! って言われてる所の?!」

「そうだ。ああちなみに、お前に拒否権は無い。」

「っ、……………」

「おい、何時までもそこで落ち込むな、鬱陶しい。さっさと行って来い。」

という内容により、ボスの右腕とまで言われている人に蹴り出されて、高級車に無理やり詰め込まれ、人生の終わりを覚悟しながら此処まで来たのだ。

ちなみに、今さっきまで乗っけられていた車は早々に走り去った。

運転手の

「骨ぐらいは拾ってやるよ。」

という言葉を置いて。

ああ、俺の人生短かったな……………。
空がやけに蒼く感じる。

「ねえ、そこで何やってるの?」

いかんいかん、物思いに耽り過ぎていた。

唐突に意識の中に入り込んできた、澄んだ高い声に意識を向けてその聞こえてきた方向をみると。

見事なビスクドールが居た。いや、たぶん生きてる人間だが。

金茶のキラキラと輝く襟足の長い髪に、翠色に澄んだ円く大きな瞳、そして素肌は透き通るように白く。顔には、形良く少し低めの鼻梁の通った鼻と、淡い色をした唇が配置されていて。

まだ成人していないのか幼く見える顔付きだが、そこには完成されている美があった。白のシャツ、黒のパンツといった格好で、華奢な体格だ。

神の愛し子とはこういう人のことをいうのだと本気で思う。

「ねえ、聞いてる？何か用事でもあって此処に来たの？」

ハッと意識を戻して、正面を見れば、そこはやっぱりディセッターレファミリーの屋敷で。

……という事はこの子は…。

え？うそ、マジ？

「ええと、そうだけど。 कोरोレファミリーから連絡、来てないか？」

「 कोरोレ…、ああ！、あなたがそうだったんだ。待ってて、今開けるから。」

「あ…ああ。」

やっぱり、どこから見ても精巧な人形にしか見えねえ。
っていうかあいつ、性別はどっちだ？

「お待たせ。部屋まで案内するからどうぞ？」

一端屋敷まで行っていたあいつがまた来たとおもったら、自動で結構すばやく門が開いていく。

随分重そうで頑丈そうな門なのに数秒で開閉出来るんだな…。

「此処もマフィアのーつだからね。何時奇襲されても対処しないといけないでしょ？なのに門が開きっぱなしじゃあねえ…？」

意外そうな表情でも浮かべていたのか、そいつはちらりとこちらを見たとしたら、肩を竦めてそう宣のたまった。

ああ、天使の顔してそんなこと言っただ欲しくなかった…。
なんでか夢が壊されたような気がして心の奥底で嘆いた。

「屋敷の中、広いから勝手に動かないでね？…まあ、動いてもいい

けど。死にたくなかったら大人しくしといた方がいいよ。後、そこからへんのモノにも触らない方がいい。」

そう、あだ名天使（命名俺）が言ったと同時に、俺がぶつかってしまった壁に向かってナイフが飛んできた。

……………心臓が縮んだ……………。

俺の目の前を横切って壁に刺さっているナイフを横目で見て、冷や汗をかく。

おいおい…どうなってんだこの屋敷。

「そういう仕掛けや部屋が多く在るんだよ。気をつけてね。」

一瞬の判断で俺が前に進むのを抑えてくれていた天使が助言してくれる。

…助けてくれたのは、ほんとに助かったけど……………出来ればもう少し早く言っただけです、天使様。

「此処だよ。準備があるからちょっと待っててね？」

そう言い残して、天使は去って行った。

いや、待ってるのは構わないんだけど…正直この屋敷の中で一人にされたくねえ…。

センスのいい、しかし見た目は派手ではない高級品に囲まれた部屋

の中で、碌ろくに動くことも出来ずにソファで固まっていると。

「ああ？何だ、ここ使用中だったのか…。」

「あ、ディッセターレファミリーのボスの方ですか？」

「や、違う違う。…ってというか、お前、ボス知らねえの？」

「え、はい…そうですね。」

「へえ…。」

入ってきたのは、ガタイの良い、黒髪黒目の貫禄のある男性だ。ただ、マフィアというより、海賊？みたいだが。つて、何でこの人ニヤついた意地悪い笑みを浮かべてこっち見てるんだ；

「えっと、何か？」

「いいや、こっちの都合。ハハ、まあ頑張れよ。」

そう言うから、去るのかと思えば、脇にあるソファに座ってしまった。

どつちやら居座るらしい。

さっきから観察する視線を感じる。

……居心地、悪過ぎだ…。

「だーかーらー、偶々だって。花の水やりをしようと思ったたら門の前に居たから気になったの。」

「あのですねえ、あなたは今日、屋敷の中に居て下さいって私言っただでしょう？」

「はいはい。聞きましたよ。でも、朝から缶詰めだったんだからちよっと外行こうとしたただけだって。」

「全く……。」

さっきの天使と、均整の取れたバランスの良い体格をした背の高い、茶髪、焦げ茶の瞳をした理知的な雰囲気の漂う人が同時に入ってきた。

…この人が、ディッセターレファミリーのボスか？

「初めまして、コロレファミリーの代理の者です。今日は書類を受け取って来いと言われたんですが。」

「……あなたまたやりましたね…？」

立ち上がって、俺がその茶髪の理知的な人に言うと、その人が眉をひそめて天使を見遣った。

…あれ？もしかして違ったのか？

半分混乱の境地に陥っていると、黒髪の海賊っぽい人が爆笑しだした。

視線が集まっている天使は、海賊の方を見てから、俺に視線を真っ直ぐと合わせてきた。

それに何故か反射的に怯んでしまった俺は、慌てて言葉を探すが、何も見つからずに言い淀む。

「え、え〜と…」

「ふふ、ごめんなさい。別に騙すつもりは無かったんですけど。混乱させたみたいですね。

初めまして、コロレファミリーの方。私が、ディッセターレファミリーのボス、ルーチェと申します。」

何と天使は、とんでもないことをぶつちやけてくれたよ、くそつ。ただの使用人とかじゃないのかよ〜！！
良く考えれば、マフィアにそれも居るはず無いんだけどさつ。

今までの柔らかな雰囲気を残しつつ、一気に気配が鋭くなった。さっきまでとまるで違う。別人のようだ。

驚きのあまり、口をポカンと開けてしまう。叫びさえでないが、頭の中は大混乱だ…今、俺アホ面になってるな…。

「……………あ、あなたが……………ボス、ですか。」

「はい、そうです。」

体格も華奢で、顔立ちも童顔で整っていて、美人という言葉が似合うし、全く抗争なんかとは無縁な感じだが。

そんな人が、ボス、か。

だが、今此処に立っているだけでも圧倒的な力の差を感じる。

…成程、皆の言う「ボスには気を付ける！」の意味が分かった気がするな。

というか、ルーチエって…女性、か？

「えっと、…失礼なのですが、性別を伺っても？」

混乱のあまりに思考がおかしくなっているらしい。どうして今、そこを訊いたんだ、俺。

けどボスはきょとんというような表現の表情を浮かべて、愉快そうに口端を持ち上げた。

……なんか解かんねえけど、面白かったらしい。

「あなたはどう思います？私が、女か、男か。」

「えっ!？」

まさか、そんな切り返しをされるとは思わず、微妙に仰け反ってし

まった。

どちらにしろ、こんな質問をされたら、普通ムツと思うんだが…。

…ああ成程。ボスだな、間違いなく。

「ええつと。女性の方ですか？」

「さあ。どうなんでしょう。あなたの思った方でいいんじゃないですか？」

…いや、そんなにこつと微笑まれても。

つて、性別が適当で良いんですか!?

「私にとってはどちらでも良いんですよ。些細なことですから。さてと、…はい、これ कोरोレファミリーのボスに渡して下さい。結構重要なモノですから、失くさないで下さいね。…失くした場合、生命の保証、できませんから。」

にこにこ笑顔で言われた言葉に、思わず、渡された書類を落としそうになる。

何ていうことを、この人は軽々しく言うんだ。

「では、そちらのボスと右腕の人によろしくと伝えて下さいね。…帰りは別の者に案内させますから、くれぐれも気を付けて…。」

何か、そう意味深に言われるとすっげえ不安なんですけど…。

言うだけ言っつて、俺をピシッと氷のように固まらせてから、笑い過ぎて涙をためている海賊？とこめかみを押さえた茶髪の理知的男を連れて部屋を出て行った。

ああ、俺一体どうなるんだ…。

窓から外を眺めると、真っ青な青空が広がっていて…何故か目に痛かった…。

(後書き)

読んで頂き、ありがとうございました。

希望があったら、続編もどきを書こうかなと思っています。

感想などもくれると喜びますww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9804k/>

とあるところの平和？なマフィア

2010年10月16日00時43分発行